

## イスパニア会 会報第3号

### 目次

会長挨拶	西川 喬
ペニユエラ先生追悼	伊藤 嘉太郎
	田尻 陽一
	岩根 國和
	田岡 敬造
海外生活	内田 雅夫
海外便り	土屋 寛子
	橋本 太郎
	大倉 みどり
新聞記事	バレンシアの新聞
現在のイスパニア学科	野村 竜仁
在校生と中南米駐在経験卒業生との交流会	谷 善三
学生からの海外体験記	荒川 亜弥
語劇祭	会報編集委員会
近況報告	19名
理事名簿	イスパニア会理事会
原稿執筆要項	会報編集委員会
編集後記	吉田 昌洪

## 会長挨拶

西川 喬

1969年（昭和44年）卒

神戸市外国語大学イスパニア会が発足して今年で15年になる。この会を作った当時のことを思い出す。設立の動機は至極単純なもので、他の学科が大学の同窓会である楠ヶ丘会に学科支部を置いているのだから、イスパニア学科でも作ろう、というラテン的な軽い「のり」であったような気がする。ところが、実はそう思ったのは私だけで、会報第1号に設立の経過が書かれていて、それを読み返すと、きちんと手順を踏んだことが記されてある。私がこんなふうに不真面目に覚えているのは、たぶん最初の話し合いが大学前にある居酒屋で一杯やりながら、親しい仲間たちが7、8人集まって、楽しく盛り上がったせいかもしれない。

設立から15年も経つと、会報も第3号を出せるようになり、中身も充実したものになってきた。ようやく揺籃の時期を脱して、それなりの活動ができる年齢に達したというべきだろう。新しい方が理事になり、イスパニア会創設時のメンバーの何人かと入れ替わりになった。こうして、いわば新陳代謝を繰り返しながら、この会は発展していくのだろうと思う。

本学にイスパニア学科が設立されたのは1962年のことだから、学科としてはもう50年以上が経過したことになる。会報作成を通して、わかったことは実に多くの人材が世界の各地にいて、活躍されているという事実だった。年代の異なる、つまり、卒業年次が違う人々が、さまざまな仕事や業務に就かれて、スペインやラテンアメリカで活動されている。さらには、アフリカのような、イスパニア圏以外にもこの学科の卒業生が家族と共に赴任して、頑張っているというのは、驚くと同時に頼もしく感じられることであった。

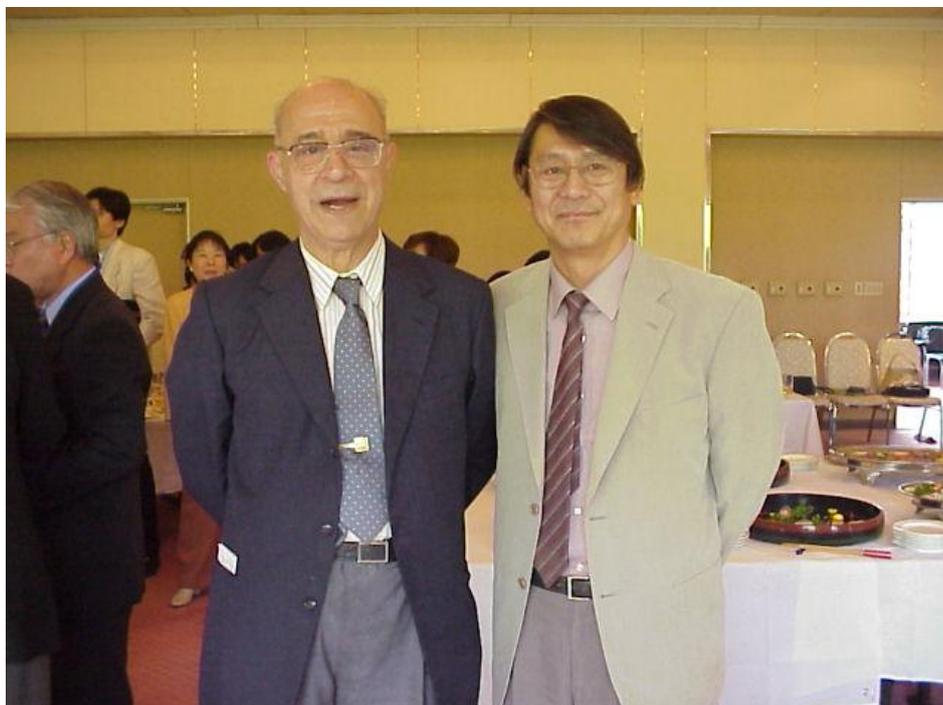
神戸市外国語大学のイスパニア学科卒業生は、他の学科卒業生と同様に、世界で活躍している方が多い。今はそうした人たちとネットを使えば、瞬時にやりとりができるようになっている。このイスパニア会が、会報を通して、大学の同じ学科を卒業した人たちの交流に役立つことを切に願っている。

神戸市外国語大学で長い間教鞭をとられたペニユエラ先生が逝去された。この訃報に接して、一言追悼の言葉を述べたい。

Mariano Peñuela 先生は、1954年7月にイエズス会の神父として来日された。しばらくは東京におられたが、1963年に六甲教会の司祭として神戸に来られ、翌年、神戸市外大でスペイン語教授を担当され、以後10年に渡って教鞭をとられた。私はそのうち、6年間に渡って先生に教えをいただいた。先生との思い出は数々あるが、特に大学院では、日本の小説をスペイン語にするという授業が行われ、2、3人という少人数のクラスで、それこそ手を取るように様々な表現を先生から教えていただいた。その後、私が本学の教員となり、スペイン語を教えるようになってからも、いろいろな事で御教示をいただいた。そんな時、あれはいつのことだったか、ある研究分野で論争などがあり、アドバイスをいただきたくて、寒い冬の日先生のお宅を訪れたことがあった。私の話を聞いて、ペニユエラ先生は、「西川君、そんなときは、闘うのですよ」と力強い声でおっしゃった。日頃は温厚な先生が、そんな強い言葉を使われたことに驚いたけれども、その言葉はその後の研究生活において、ずっと支えになっている。長い年月が流れたけれど、時折その時のことがまるで昨日のこのように、よみがえってくることもある。先生にはスペイン語のみならず、あらゆることにおいてお教えをいただいた。

先生は2015年9月11日に逝去された。享年88歳だった。イスパニア会からは東京の聖イグナチオ教会で行われたご葬儀に際し、供花と弔電を送らせていただいた。

ペニユエラ先生のご冥福を心から祈りたい。



在りし日のペニユエラ先生と。久しぶりの再会だったが、とても力強い握手だった。  
2003年5月24日イスパニア学科同窓会パーティ 外大三木記念会館にて。

## 追悼文

マリアノ・ペニューエラ先生のご逝去を悼む

伊藤 嘉太郎

1966年（昭41年）卒

2015年9月11日にペニューエラ先生がお亡くなりになった、との訃報がその2日後に友人より eメールで届いた。その瞬間まず頭に浮かんだのは、1960年代の前半にわれわれがスペイン語を教わった頃のあの長身で温和な笑顔の人懐っこい先生の面影だった。先生が東京にあるカトリック教会の施設で闘病生活をされているということは数年前に仄聞していた。実のところ、小生はもう半世紀も昔の1966年4月に卒業して社会人になってから勤務地が大阪と海外ということもあって、東京とはほとんど関わりがなく誠に残念ながら先生とは一度も再会する機会がなかった。だからいまでも小生の頭の中には50年前の先生の面影だけが強く残っている。

先生はわれわれ1期生が3回生だった1964年5月に神戸外大で教壇に立たれたが、その年新学期が始まってすぐにそれまで教鞭をとられていたドミンゲス先生の後任となられ、その交代があまりにも唐突だったという印象があった。しかし、われわれは厳しい前任の先生の後に、優しく人懐っこいペニューエラ先生が来られてなにかほっとした気持ちになったことを覚えている。享年88歳とのことなので、逆算するとその当時先生は37歳という若さでわれわれを指導して下さったことになる。ペニューエラ先生は、アルバレス先生、ドミンゲス先生に次いで3人目のネイティブの先生で、国際都市神戸であってもいまとは違って当時はスペイン語圏のネイティブの人と話す機会は極めて少なく、いわば生のスペイン語を耳できる先生の授業は貴重だった。

ペニューエラ先生の授業でいちばん印象に残っているのは、確か4回生の時だと思うが、志賀直哉の『城崎にて』という短編小説の翻訳だった。いま考えるに、恐らく当時は作文用の適切な教材もなく、半ば手探りでいかに質の高い授業をわれわれ学生に提供するかを真剣に考えられた結果、短い文章が特徴の同作家の作品がスペイン語訳する上で相応しいとして選択されたのではなかろうか。われわれが手にしていた和西辞典は小サイズのもので語彙が少なく、とにかく知りたい単語がなかなか分からなくて四苦八苦した記憶がある。予習して

いなければ授業で当てられてもその場で満足なスペイン語訳ができる筈もなく、ペニユエラ先生はわれわれの“迷訳”に随分面喰い、辛抱強く対応してくれたのではないだろうか。

それともうひとつ小生にとって個人的に忘れ難い思い出は、1964年秋に名古屋の南山大学で行われた全日本学生スペイン語弁論大会に参加することになり、そのための準備に惜しみない指導と支援をして下さったことだ。小生が起案したスペイン語原稿のチェック（小生は当時社会問題となっていたわれわれと同世代の少年非行を取り挙げた『*Delincuencia Juvenil*』をテーマとした）、話し方、発音、それに何度も練習に立ち会って懇切な指導をしていただいた。小生のほかにも仲間が2名参加した。当日はペニユエラ先生も名古屋へわれわれと一緒に列車で付き添って下さった。その道中で握り寿司の駅弁を買い列車の中で一緒に食べ、今では何の不思議もないが、その時は神父さんも生ものを食べるのだと意外な印象をもったことを覚えている。そして、車中でお祈りの時間になると、われわれとの会話を『ちょっと失礼』と言って中断し、持参していた聖書を開いてしばらくお祈りの言葉を小声で唱えておられた。その時の先生の顔つきは一変して神父さんそれだった。

弁論大会では小生は力不足で入賞できなかったが、その準備を通してペニユエラ先生と親しくさせていただきご指導を受けたことは、語学力を高める上で大きなモチベーションとなった。

われわれ一期生は、現在学園都市にある快適なキャンパスへ1986年に移転する前の六甲山麓の楠ヶ丘にあった古い木造の学舎で、冬の寒さと夏の暑さに耐えながら学んだが、高橋正武先生、林一郎先生、鼓直先生、長南実先生といった錚々たる教授陣の薫陶を受けるという実に恵まれた環境にあった。

それと併せて、小生は在学中ラテンアメリカ研究会（顧問：林一郎先生）に属し、メンバーである英米・中国語学科の諸先輩が第2外国語として学んでおられたスペイン語をいともやすやすと話しているのに接し、何とか先輩方のレベルに追いつこうと大いに刺激を受けたこともよき思い出である。

卒業後長期間にわたりスペイン語を使って仕事をする機会を与えられ、会社を定年退社後も今日にいたるまでさまざまな形でスペイン語との縁が続いている。

古稀を過ぎ白頭のいま思い起こせば、母校にてペニユエラ先生をはじめとする恩師や先輩の方々のお蔭で今日のわが人生があることは紛れもない事実であり、そうした素晴らしい縁や環境に恵まれたことにあらためて深い感謝の気持ちが込み上げてくる。

卒業直前に大学の新しい正面入口の階段で撮られた、イスパニア学科 1 回生から 4 回生全員集合の記念写真が残っている。どういう訳かペニユエラ先生の姿はその写真にはないが、裏に門出のメッセージを揮毫していただいている。“Que lleve las grandes esperanzas que pongo en usted.”（大望を抱いていざ前進を）果たして先生の期待に応えられたどうか心許ないが、先生の思い遣りの気持ちが込められたこの言葉は、いまなお小生に若き日の熱き情熱を甦らせてくれる。

ペニユエラ先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

Que Descanse En Paz, Nuestro Querido Profesor Peñuela.

## 追悼文

### 会うは別れのはじめ

田尻 陽一

1966年（昭41年）卒

「会うは別れのはじめと申しまして、……」と林先生が言われたことを鮮明に覚えている。われわれ1期生をアルバレス先生と共に教えてくださっていたドミンゲス先生が広島に移られることになり、その送別会の席上だった。ドミンゲス先生のあとがペニユエラ先生だった。誠実、実直というのが第一印象だった。

外大を卒業してからもときどき六甲教会に行き、ペニユエラ先生とスペイン語の会話を練習していた。そんなとき、大阪の会社に研修に来たスペイン人が、スペイン人の神父さんのミサに出たいと六甲教会に来るから、よかったら紹介するよと言われた。1965年のことだ。1年後、スペインへ留学するとき、紹介してもらった彼を頼った。その後も友達付き合いを続けて50年になる。結婚、3人の子供、その孫たち、クリスマスにスペインへ行くと、家族同様、一緒に楽しく過ごしている。いい人をペニユエラ先生から紹介してもらった。

しかし、この原稿でペニユエラ先生に言わなければいけない。

「会うは別れのはじめ……」

ご冥福をお祈りします。

## 追悼文

### ペニユエラ先生 追悼

岩根 圀和

1969年（昭和44年）卒

明石の片田舎と言うも恥ずかしいような漁師町に育った少年が、成人して初めて間近にしげしげと眺めることの出来た外国人がペニユエラ先生であった。まさに南蛮屏風から抜け出たような紅毛人。なるほどこれが音に聞くスペイン人か息を飲んだ覚えがある。当時、流行りの音楽「トリオ・ロス・パンチョス」のスペイン語の音に恍惚としていた私であったが、自分で選んだスペイン語学科とは言え、もとより生のスペイン語を聞くのは初めてであった。今から思えばペニユエラ先生も澁刺とした青年であったのだろうか、どっしりと音量のある美声で言われる「ムイ・ビエン」が今も耳に残って懐かしく思い出される。

授業や語劇にまつわる思い出についてはさまざまあって、許された紙幅ではとても収まりきれない。そちらは諸兄にまかせるとしてひとつだけ忘れられないエピソードがある。その昔、阪急電車が運賃の値上げをしたときのこと、われわれ学生たちはガヤガヤとその非を鳴らしていた。すると先生が言われた。「そうですか？ 私はそう思いませんね。ここから三宮まで90円で運んでくれるんですよ。安いものです。」なるほどキリスト者はそう考えるのかと私は納得もし、感心もした。心の優しいお人だったのだ。

心から冥福をお祈りいたします。

## 追悼文

### ペニューエラ先生の思い出

田岡 敬造

1976年（昭和51年）卒

2015年9月12日の朝、東京のイエズス会から電話があり、ペニューエラ先生が前日の12時30分に亡くなられたと連絡がありました。享年88歳だったそうです。前年4月にお見舞いした時には、意識はありましたが相手が誰だか区別がつかないようで、意思疎通ができない状態でした。ただ握手した手を何度も握り返してくれる力強さは今でも鮮明に残っています。

思い返せば、先生との交流は私の青春の強烈な思い出のひとつでした。大学の授業だけでなく、入学から3年半過ごした男子学生寮でも、本当に色々と教えられました。

最初の出会いは、1972年4月の入学手続き時に、四国の片田舎から出てきて学生課で下宿を探していると、係の人からイスパニア学科なら六甲会館がお勧めですと紹介され、入寮の面接でお会いした時でした。よく通るはっきりした声で「お名前は？」と聞かれ、生まれて初めて出会うスペイン人との“日本語の”会話に戸惑ったことをはっきり覚えています。

入学後、厳しい緊張感の中にも温かみのある授業が始まり、分厚い赤い表紙の教材との悪戦苦闘の連続でした。「エスタモス、エスタイス、エスタン〜！」の活用が今でも耳に響きます。赤本での苦い思い出がありました。私の順番で日本語の解説を読んでいる時に、「恰も」という漢字の読み方で詰まっしまい、例の声で「あ・た・か・も」と言われた後、「日本語は、難しいですね。」と付け加えられました。2年生で語劇に出演した際にも、時折稽古場に顔を見せられ、発音、イントネーション、声の大きさなど細かく指導を受けました。

大学から戻られると、六甲教会の神父として、学生寮の舎監としても忙しい毎日を過ごされておられました。10代後半から20代前半の、さまざまな大学の未熟で、不躰な若者達との生活には、さぞやご苦労なこともあったと思います。それでも寮生達とは、夕食は食堂で一緒に取られ、入浴も同じようにされていました。新入寮生歓迎会では、必ずお得意の「武田節」を披露され、毎回満場の喝采を浴びました。

一方で寮生活の規律面では、舎監として就寝前の見回り時などに、厳しい指摘をされたことは1度や2度ではありませんでした。2年生から4年生までは、先生の真下の部屋で過ごしたことも懐かしい思い出です。スペインで獣医の資格を持っておられたことを知った時には、先生の意外な一面を垣間見た気がしました。今となっては、先生の「そうですね〜」、「そうですか〜」と「あっ、そう」の区別はどうだったのかを直接確認できなかったのが心残りです。

卒業旅行でコルドバを訪れた時、グアダルキビル川にかかる橋の上で、夕日に輝くメスキータやアルカサルを見ながら、ここで先生が生まれたのかと不思議な感動を覚えたことを記憶しています。先生によく似合うアンダルシアの町を出て、遠い異国に来られ、神戸をこよなく愛し、日本でその天寿を全うされ神に召されたペニユエラ先生に、改めて心から哀悼の意を表したいと思います。



## 海外生活

### ベネズエラ人にいわれた Místicacultural

内田 雅夫

1971年（昭和46年）卒

パナマ駐在の時代というから、すでに30年以上も前の話です。当時、ベネズエラは石油収入が大きく、中南米では有力な国、家電市場も大きなものでした。そのため、パナマから頻繁にベネズエラ出張を行って **Distributor** と商談していました。

1985年前後、石油で潤うベネズエラの鼻息はあらいものの当時のベネズエラの国情は政治、経済ともいびつで、官僚中堅クラスが全然育っておらず、経済面は優秀な移民に頼っていました。しかし、誇り高いベネズエラは高圧的で、入国の手続きもなかなか大変でした。ビジネスの場合、**Visa transeúnte de negocios** の種別のビザを要求されていました。

このビザの手続きが大変で、申請にはパナマのベネズエラ指定医師の健康証明書が必要でした。また、出張を終えて、出国するさいには、ベネズエラ滞在日数に見合う所得税をベネズエラで支払い、その支払い証明 **Solvencia** が出国時には要求されていました。

前置きが長くなりました。パナマの健康診断をするときのことの思い出です。何回も出張するので、この指定医師とも懇意になり、ときには、俺は健康だから証明書だけ発行して下さいというようなやりとりもあったものでした。というのも、診断項目には、性病罹患有無があり、血液検査による梅毒の検査があったのです。余談ですが、当時、まだ、エイズ（スペイン語では **SIDA**）はそんなに危険視されていませんでした。

血液採取は日本のようなやさしいものではありません。先を尖らせた、ブリキの 1.5 cm の四角いものを指の先にブスッと突き刺し滴る血液を取るのです。私は、これが恐ろしく、何度も、勘弁して下さい、私は梅毒は持っていませんとお願いしました。

検査後、問診するのですが、このとき先生との世間ばなしで「日本は、今、テレビや電気製品で素晴らしい品質をもち、世界中に輸出しているが、モノの輸出でなく、日本人の考え方、“**manera de pensar**” や “**filosofia**” を輸出し

て世界に広めるべきではないのか」と先生は言われました。モノは早晚、行き詰る。そのうち、韓国やなんかが追いついてくる。モノの競争より、日本人の生きざまを世界に知らしめて、Misticacultural で勝負すべきだと言うのです。

ベネズエラ人は高慢でほこり高く独善的なひとが多いという印象でしたが、彼は、インテリでコスモポリタンで、日本や日本人に対する理解もあり、ベネズエラ人でも色々な人がいるものだと思います。

日本の売り物はモノではなく、心であるというのは、モノの輸出が行き詰ってしまっている現在にも充分に通じることなのだと思っています。

新幹線の輸出など、設計思想や保守技術、定時運行の現場などをアピールすればよいのと思います。もっとも、札束で頬つぺたをたたきやり方で勝負されるとお手上げです。それでも、こつこつと誠意でやる以外、手がないのが日本の商法で、私はこれが日本人の日本人である所以と思っています。これもMisticacultural かも知れません。

## 海外便り

### スペイン語と出会って

土屋 寛子

1996年（平成8年）卒

私は神戸で生まれ育った純粋の日本人で、静岡出身の両親が守る家は朝晩白米と味噌汁の出る和食中心の家庭で外国文化とは無縁だった。でもなぜか幼い頃からハーフに間違えられることが多く、自分自身も外国人に惹かれ、学校の通学路で近所の外国人家族とすれ違ふとときどきするような子供だった。

そんな私がスペイン語を勉強したい、と口にしたのは11歳ぐらいのときだったと思う。大学受験を意識し始めた高校2年生ぐらいから、実家から通える神戸市外国大学でスペイン語を学びたいと具体的に目標を掲げたものの英語も含め勉強は特別得意なほうではなかった。高校3年の時、毎日新聞の神戸市ニュース欄に「スペインから神戸市外国大学にホセ・パソ教授就任」という記事と写真が掲載された。ミーハーにもまだ会ってもいない「カッコいいスペイン人教授」のファンになり、その記事を切り取り勉強机に張ってこの先生にスペイン語を学ぶぞと誓った。通っていた高校の同級生のお父上がたまたま神戸市外大の教授をされていたことの縁も重なり、受験前にキャンパスを案内していただいて大学生たちに混じって学食でランチをご馳走になった。ここまでしていただいて落ちるわけには行かない。そんな思いが最後のラストスパートを支え見事合格。憧れの大学でついにスペイン語の勉強を始めることになった。

両親が支援してくれた御蔭で3年生の時交換留学制度を利用してトレドのオルテガ国際教育センターへ留学できた。外国へ行くのも両親の元を離れるのもはじめての経験。何もかも新鮮だったその時の数ヶ月が私の人生の方位を決定する大きなきっかけとなった。

Hola！すら知らなかった大学入学時から20年以上。スペイン語と出会ってから私の人生はスペイン一色だ。就職活動もせずただ夢のようにスペインで暮らしたいと思いながら大学最後の一年は東谷教授の下でスペイン近代文化の研究をした。ペドロ・アルモドバル監督の一作品を卒業論文のテーマに選んだ。聞こえはカッコいいが、まじめな研究は性格的にできないことがわかっていたの

で、入学が決まった時からペドロ・アルモドバル監督の一作品を卒業論文のテーマにすることは決めてあった。

大学卒業3年後、念願通り1999年にマドリードに移住した。その数年後のある夏、マドリードにて足を運んだコンサート会場に偶然アルモドバル監督が居合わせたことがあった。スペイン人の友人に背中を押され勇気を奮い立たせ近づき声をかけた。そして長年のファンであること、卒業論文に彼の作品をテーマにしたことを伝えた。すでに「世界の偉人監督」であった彼が「よく卒業させてもらったね」と笑いながら応じてくれたことは今でも大切な思い出となっている。だから卒業させてくださった東谷先生にここで改めて感謝の言葉を述べさせていただきたい。

こんな風にしてスペイン語とスペインの魔力に取り憑かれた私にとっても、スペインの生活が常に愉快的なわけではない。日常生活に置いてはカルチャーギャップにも未だに悩まされる。

例えばスペインの公共交通機関に乗り、たまたま込んだ車両の入り口近くに立ったとする。次の駅が近づき周囲がそわそわし始めたと思うと、いきなり隣の人が肩を叩いてきて「あなた、次で降りますか」と聞いて来る。その時いつも私は頭の中では「聞かなくても扉付近に立っている人がいったん車両から降りるのが常識でしょ」とややイライラを感じながら言っているのである。

仕事場の日本人が口を揃えて文句を言う「スペイン人は言われたことしかやらない」。相手の心理の先周りをして行動を起こす日本人とは逆に、スペイン人は、相手の考えていることはわかる訳がないのだから自分がわかっていることに従う。知らない、頼まれていない、聞いていないことはあまり率先してやらないように見える。そこで「気が利かないのだ」と我々日本人が嘆くのだが、スペイン人にしてみれば「相手がきちんと意思表示をしたり、具体的な指示や意見を言わない前に行動をすると間違いを犯したり、余計な仕事をしたりすることになるのだから、はっきり相手が何かの依頼をするまで行動はしない。日本人は非合理的だ」となる。日本人にしてみれば「気を利かせて先に行動してあげることが相手の手間を減らせて親切かつ合理的」のはずなのにここではそうじゃない。異文化に暮らすのだから寛容が肝心。違いを受け入れ乗り越えられてこそ真のグローバルな人。なんて言うともまるで達観しきったような響きだが、さすがにいつもそれをしていると、身につけてきたはずの日本人らしさをつい見失いがちになるからそれも難しい。

互いの違いをあげだせば限がないが、不思議なことに知れば知るほど日本との共通点が見つかるのもスペインの魅力だ。関われば関わるほど愛着の沸く人

間味のあるスペイン人。日本人でありつつスペイン人並みにスペインが好きな自分にできることはやはり、草の根レベルであってもスペインの素顔を日本に伝えていくことなのだろう。その道をどうにか歩み続けている間に、きっと日本とスペインとのよい塩梅が自分の中にも出来上がってくるのかも知れない。そんなことを思いながら一年前に“スペインの扉”というブログを立ち上げ、仕事の合間に自分の見るまま思うままのスペインを日本語で発信する活動を始めた。一人でも多くの人にこの活動を知ってもらいたい。一緒にスペインファンを増やしてスペイン旋風をいつか日本に！



ウェブ：[www.spainnotobira.com](http://www.spainnotobira.com)

フェイスブック：[www.facebook.com/spainnotobira](http://www.facebook.com/spainnotobira)

お問い合わせ：[contact@spainnotobira.com](mailto:contact@spainnotobira.com)

## 海外便り

### 気がつくとザンビア

橋本 太郎

1995年（平成7年）卒

卒業から20年、母校の印象も年々薄れつつある中で、諸事情で一年早く卒業した吉田君からこの原稿の執筆依頼を受け取った。勉学に身を入れる事の出来なかった私が、会報という場に何がしかを残しても良いものか、とも思ったが、彼が後押しをしてくれたお陰でこれを書いている。

将来は海外勤務→では商社か→外国語専攻が有利か→英語は普通すぎ→ならスペイン語は希少価値ありそう、という短絡思考で学科の門を叩き、何とか卒業し、希望通り商社に入り、希望通りラテンアメリカ諸国との商売を担当する事になった。大学時代の学問に対する不実の対価を大いに支払い、何とかまともに商売相手とやり取りが出来るようになると、出張にも行き、ラテン文化にも触れあい、卒業からかなり後付で「イスパで勉強して良かった！」と感じた次第である。その後、ラテンと係わり合いながらキャリアを重ねていけると思っていたが、不実の対価完済は出来ていなかったようで、パイプは断ち切れ、今は遙かアフリカのザンビア共和国で働いている。



ザンビアと聞いて、具体的イメージを思い浮かべる事の出来る人はかなりのアフリカ通である。サブサハラの内陸国。人口1,350万人、日本の面積の約2倍の753,000㎡、2013年度GDPはUS\$ 268.2億、福井県のそれとほぼ同じ経済規模である。主要産品は銅（2013年、産出量で世界第8位）、獲得外貨の78%を依存している。世界三大滝のビクトリア滝が存在し、有望な観光資源だが、インフラ未整備により十分に活用

出来ておらず、銅に頼る一本足打法経済が長年の課題。その他産業の育成を政府は後押しするが、脆弱なインフラが内陸国というハンデを大きくし、

様々なコストが割高となり、海外からの投資は進まない。そんな中、中国のみが、資源確保の目的もあり大変積極的に投資を推進、躊躇するその他の国を尻目に、存在感を速いスピードで大きくしている。わが国も、アフリカへの関与を強める方向性を打ち出しているが、現状、存在感はあまり大きいとは言えない。

そんなところで、一体何をしているのかというと、今の業務はトヨタの当地代理店の経営サポートに携わっている。アフリカではトヨタはレジェンドで、耐久性・信頼性は大変に大きい。新車の市場は小さくなく、年間で3,200台程度、その中でシェア50%を維持出来ているが、新車のお客様は、政府、国内外企業、国連、NGO、一部の富裕層に限定されている。庶民の脚としては日本から輸入の中古車を中心。過去5年間で30万台の中古車が輸入されている模様で、新車のそれを大きく凌駕している。大変に古い車両が多く、2000年～2005年製モデルが未だに現役で走っている。仕事の話をするれば、苦労話やまたは愚痴などであつという間に字数が重ねられてしまうのでこのくらいにして、ザンビアでの生活についてご報告したい。



銅の露天掘り鉱山。  
奥行き 5km、深さ 500m



世界三大瀑布  
ビクトリアフォールズ

当地着任は2014年5月、妻と息子と一緒に駐在2年目を迎えた。気候は雨季と涼しい乾季、暑い乾季の3つ、暑いといっても乾燥しているので過ごしやすい。雨季も梅雨のような陰鬱なものではなく、午前中は晴れていて、そのうち入道雲がぐんぐん成長して、夕方から雷雨、という大変にメリハリの効いたものでさほど不快ではない。通年蚊は多く、絶えずマラリアのリスクがある。当地は蚊取り線香系より、より直接的なスプレー殺虫剤がポピュラーである。見つけたら殺す、というのは面倒なので、我が家ではもっぱら日本からの出張者に持参頂いているトラディショナルな蚊取り線香を愛用している。食べ物については農業が未開発、また物流が整っておらず、野菜の品が不足している印象。特にレタス

等の菓物がなく、根菜がメインとなる。内陸国にて魚は淡水魚のティラピアがメインで、まあ、そう積極的に食べようという気はしない。肉は、国策で力を入れており牛・豚・鶏とも豊富であるが、特に牛の「筋の入りかた」は尋常ではなく、まず間違いなく食後にデンタルフロスが必要なる。

家族で一緒に楽しむ娯楽はかなり限定されている。郊外に行けば動物もいるが、数回見れば十分で飽きる。何よりも海が無いのが痛く、閉塞感を感じる事もしばしば。中央部に世界有数の大きさのダム湖・カリバ湖があるが、やはり所詮はダム湖である。仕方なく始めたゴルフで閉塞感を解消しようとしているが、下手なうちはそれも望むべくも無い。こじんまりした日本人社会の中で、毎週のようにBBQ大会があり、そこで望郷の念をお互いに吐露しあう、というのがストレス発散の有効手段である。

ラテンアメリカ諸国も未開発な国はあるが、上手く言えないが空気が違う。植民地化から独立までの期間の長短、旧宗主国（ザンビアは大英帝国）のお



大使館主催の日本文化紹介イベントでの筆者とその家族

国柄の違い等に起因している気がする。イスパ会報上だから正直に言うが、ザンビアの水に馴染んだかと問われれば、力強くイエスと言えない。まあ、無理に馴染む必要もなく、上手くストレスマネジメントをして、良いところはしっかり見て、嫌だなと思うところは感じないようにして、家族共々、せっかくのレアなチャンスを出るだけエンジョイしていく所存である。

## 卒業してから

### クスコに住んで

大倉 みどり

2014年(平成26年)卒

2014年3月に外大を卒業し、ペルーのクスコへ戻ってきました。ここクスコの街は、大学4年次にスペイン語留学、ボランティア活動のために約5ヶ月滞在した場所です。クスコ在住歴34年の篠田直子さんに、留学時から大変お世話になっており、娘さんのチャスカさんが経営する旅行会社、ナオツアーで働くことになりました。

社員4名の小さなオフィスで、日本人のお客さんを相手に、マチュピチュ、チチカカ湖、ナスカの地上絵など、ペルー各地の観光名所の販売・手配をしています。日本の大手旅行会社からの手配依頼も一部ありますが、基本的には、お客様と直接メールをやり取りし、日程を一緒に作って、オーダーメイドの旅行を販売しています。

他の社員がペルー人ということもあり、私は主にお客さんと直接関わる部分を任されています。問い合わせが入った時点から、何度もメールのやり取りをし、お客さんと一緒に日程を作っていきます。お客さんがクスコに到着された時に、実際に会って対応もします。そのため、仕事の約8割が日本語になります。私以外の社員も日本語を勉強しているので、社内ではJAPONES×ESPAÑOL のハポニョールで会話しています。海外在住と言っても、日本語で仕事ができる環境、私なんかはイスパニア会会報の記事を書いても良いものかと思ってしまう。

オフィス内では甘えて、ハポニョールをしゃべっていますが、一步外に出るとスペイン語しか使えません。留学もしていた町ですので、普段の生活には困りませんが、仕事でスペイン語を使うとなると話が違います。お客さんの送迎をお願いしている運転手さんたちも、日本語は「コンニチワ。」くらいしかできないので、スペイン語での会話になります。仕事を初めてすぐの頃、私のスペイン語が原因で、トラブルを招いてしまったことがありました。

ちょうど日曜日でオフィスはお休み、私の担当のお客さんも終日フリータイムとなっていたので、仕事のことはあまり気にかけず、休日を楽しんでいるところでした。突然お客さんから電話があり、初日の送迎時に車の走行感に違和感を感じたので、明日の送迎までにタイヤのチェックをして欲しいということでした。日本とは道路状況が違うため、車に問題がなくても違和感を感じることはありますが、車の点検をお願いしようと運転手に電話をしました。私は“**Mi pasajero sintió algo raro en su carro. Revíselo bien por favor.**”と言ったのですが、運転手は突然怒り出し「そんなこと言うなら他の運転手を探してくれ！」と電話を切られてしまいました。急いで社長に電話をし、事情を説明したところ、“**Sentir mal**”には「お酒の臭いを感じる」という意味があるから気を付けないとね、運転手には説明をして、誤解を解いておくからと言われました。運転手はお客さんに酒臭いと言われたと思い、かんかんに怒ってしまったということだったのです。スペイン語の難しさを改めて実感したと共に、外国で働くためには、言語だけではなく、信頼関係を築き **AMIGOS** になることも大切なのだと思います。社長に誤解を解いてもらったことで、今では一番仲の良い運転手です。今ならば、私がスペイン語で可笑しなことを言っても、笑って許してくれるでしょう。

21年前にナオツアーを起ち上げた篠田直子さんは、「昔は愛嬌でいけたのよ。」と言いますが、ホテルのプロモーションパーティーなどに呼ばれ、観光業界の人間が集まると、みんなが直子さんのことを知っています。ペルーに来た当時、スペイン語はほとんどできなかつたそうですが、長年かけてクスコの人たちとの信頼関係を築いてきたことで、今のナオツアーがあります。社員も日本語ガイドも運転手も、お互い信頼しあい、とてもいい雰囲気職場です。お客さんに関しても、半分以上が口コミで問合せ・予約を頂いています。リピーターの方もかなりいらっしゃいます。

最後に、私の職場の仲間との写真を載せたいと思います。インカの聖なる谷に新しくできた博物館へ、社員とその家族、日本語ガイドで見学に行った時のものです。パラカス文化の人たちがミイラを埋めているシーンの再現ジオラマの前にて。



(中央、白い服が本人)

この日のように特別な外出でなくても、幼稚園がお休みだったりすると、子連れで出勤する人もいるほど、文字通りアットホームな職場です。楽しく明るい環境で仕事ができ、私はとても満足しています。労働ビザを取得するために、とりあえず制作した契約書には3年契約と一応書いてありますが、なかなか抜け出せない居心地の良い場所です。いつまでここにいることになるかは、まだ分かりません。もっとたくさんのペルー人と信頼し合えるようになるには、まだまだ時間がかかりそうですし。

イスパニア学科卒業の皆さんは、日本語アシストは必要ないかもしれませんが、もしもペルー旅行を考えている方がいましたら、どうぞナオツアーをよろしくお願いします。

ナオツアーホームページ : <http://www.naotour.com/>

## 新聞記事

スペイン・バレンシアのインターネット新聞に、土屋寛子さん（1996年卒）が所属する「ASOCIACION DE TURISMO HISPANOJAPONESA」がバレンシア・ファリャ博物館を表敬表問したときの記事です。（2015年11月20日）さらに、詳しくは<FALLAS.COM>の noticia をご覧ください。土屋さんは現在、JTBに勤務され、スペイン・マドリードに住んでいます。

El Museo Fallero ha vuelto a ser el escenario escogido por Junta Central Fallera para realizar una recepción con prensa internacional de la Asociación Hispanojaponesa para promocionar las Fallas de Valencia este jueves, 19 de noviembre.

La Fallera Mayor de Valencia, Alicia Moreno, ha ejercido de perfecta anfitriona junto al Secretario General de la Junta Central Fallera, Pepe Martínez, y representantes de la Fundación Turismo Valencia. Entre los visitantes que han querido conocer en primera persona nuestra fiesta se encontraban también algunos consejeros de la Embajada de Japón.

Esta visita forma parte de las acciones de promoción exterior preparadas para que fuera de nuestras fronteras se puedan conocer todos los detalles de nuestras fiestas, atraer así a más turistas a Valencia durante el mes de marzo y, en definitiva, dar más pasos para avanzar camino de la declaración de Patrimonio Inmaterial de la Humanidad por parte de la Unesco. Tanto es así, que la Fallera Mayor de Valencia grabó en japonés junto a uno de los representantes de la delegación de la asociación una invitación a las Fallas del próximo año.



左から2人目が土屋寛子さん。ファリャ博物館の前で

## レポート

### 「ラテンアメリカフォーラム」レポート（続） （在校生と卒業生との交流会）

谷 善三

1967年（昭和42年）卒

イスパニア会会報第2号で、第1回「ラテンアメリカフォーラム」の紹介をさせて頂きました。今回、その後の経過を中心に報告をさせて頂きます。

第1回のフォーラム（2014年11月）では、卒業生側4名で「ラテンアメリカ・カリブ地域の概要」と題して、イスパニア学科卒業生が将来勤務する、あるいは、日本から取引を担当する可能性が大きな、将来のポテンシャルが高いこの地域の重要性を認識してもらうべく、簡潔な基礎データで説明して、更に私達は先輩としてこれまでの経験から後輩に伝えたい事を話し、最後に活発な質疑応答を行いました。（詳しくはイスパニア会会報2号で報告しています）

第2回のフォーラム（2015年1月）は、今自動車メーカーを中心に日本企業の進出が多いメキシコと、物流拠点として発展が著しいFree Zoneを持つパナマを、それぞれの国に長年駐在経験のある卒業生が説明をしました。講師は昭和41年卒の伊藤嘉太郎氏、昭和42年卒の私谷善三、昭和50年卒の斎藤仁氏の3名でした。斎藤氏は外大卒では経験者が少ない銀行マンとしての経験を語ってもらいました。

第3回のフォーラムは（2015年4月）「南米最大の国ブラジル」を取り上げました。昭和41年卒の商社出身の杉井皓一氏と、昭和46年卒のメーカー出身の内田雅夫氏が駐在経験を踏まえ説明してくれました。

第4回は昭和44年卒の池澤英一氏が「私の海外勤務と後輩に伝えたい事」というテーマで、中米、コロンビアとカナダの駐在経験から後輩に伝えたことを語ってくれました。後輩が熱心に聞き入る姿が印象的でした。



第5回のフォーラムは（2016年1月）昭和45年卒の柴野元秀氏が「ある商社マンのラテンアメリカの青春」のテーマで元気のでる話をしてくれました。

出席の学生からはフォーラムのテーマに直接関係ない素朴な質問も出ます。これらの質問から私達の学生時代を思い出させたり、反対に今の学生気質を感じたりさせてくれ楽しい時間になります。

大学の先生方もご都合の付く限り出席して下さい、大学での認識も高まっているように思います。昨年のオープンキャンパスでは、イスパニア学科の紹介の中でこの「ラテンアメリカフォーラム」が映像付で取り上げられました。近い将来母校で中南米事情の講座が出来て、更に、学生中心の中南米研究会やサークル（今は無くなっている部活ラテンアメリカ研究会「ラテ研」のような）が実現するよう可能な限りフォーラムを続けたいと考えています。

このフォーラムで、ご自分の駐在経験を後輩に語ってくれる卒業生を募っています。是非後輩の為に協力をお願い致します。フォーラムの全体の時間は90分です。

私の連絡先は電話なら 0798-70-1677、  
メールなら [tanicasa@bcc.bai.ne.jp](mailto:tanicasa@bcc.bai.ne.jp) です。ご連絡をお待ちしています。

後輩に皆さんの貴重な体験を話して下さいますよう心からお願い致します。



4回目の講師池澤さん、向かって左が次回の講師柴野さん、右がコーディネーターの谷さん

## イスパニア学科の現状

### 学生の声から見る、神戸市外大イスパニア学科の現状

野村 竜仁

1992年（平成4年）卒

神戸市外国語大学では、10年ほど前から学生による授業評価アンケートが毎年行われています。その結果は「FD通信」という冊子で公表されており、今回はこの「FD通信」に基づき、現状を報告します（FDとはFaculty Developmentの頭文字です）。

年度によって多少の違いはありますが、アンケートの質問は15項目程度で、「学生自身の授業態度について」、「授業内容について」、「授業の進め方について」、「担当教員について」という大問と、当該授業の総合評価からなります。各質問について5段階で評価がなされ、ちなみに全授業の総合評価の平均値は、ここ数年は4.3です。

こうした数値での評価以外に、自由記述の欄が設けられています。年度によってこの自由記述にテーマが設定されていることがあり、少し古いデータですが、2012年度は「あなたの学科について」というテーマで意見が求められました。その際、イスパニア学科の学生からは以下のような回答がありました。

#### 「要望」

- ・会話の授業を増やして欲しい。
- ・英語の学習したいと思う時、授業が少し取りにくい。もっと英語の授業の力もつけたいと思う。
- ・多面的にスペインについて学べる所がよい。もう少しスペイン語を話す機会が増えるとよいなと感じます。

#### 「批判的意見」

- ・厳しい（テストとか）。
- ・はやい。
- ・授業同士何のリンクもないのでやったこともやるし知らん事は知らない。形式的、一方的すぎる。
- ・スペイン語圏に留学したことのある人とない人のレベルの差が激しくて会話の授業に支障をきたす。

#### 「評価する意見」

- ・先生も親しみやすく、熱心で、とても楽しい学科だと思う。
- ・ネイティブの先生の授業は少人数制で話す機会も多く、より実用的なスペイン語を学んでいると思いますが、積極的に参加するしかないなかで差は出てくると思うので、自分から発言すればするほどスペイン語が身に付くと思います。
- ・様々なタイプの先生方がいらっしゃって皆さん魅力的。とても満足な学科です。
- ・イスパニア学科は、著名なだけでなく、中身の面白く、為になる授業をされる先生方が大変多く、この大学の中でも一番魅力的な教授の方々がおられる学科だと感じます。

上記のうち、科目ごとの連携をはかってほしいという意見を受けて、現在では担当教員がメーリングリストによって授業の進捗を確認できる体制が整えられています。また会話の授業については、学生の習熟度を考慮するための方策が導入され、さらなる拡充に向けて検討が行われているところです。

翌2013年度の自由記述のテーマは「専攻語学以外の科目について」というものでした。その際、イスパニア学科の学生からは以下のような意見が出されました。

#### 「学科基礎科目について」

- ・語学以外のさまざまな知識も身につけることができ、とても為になると思う。
- ・語学の背景である文化を知ることができて良い。
- ・スペインだけでなくラテンアメリカのことも知ることができる。専攻以外の学生もネイティブの先生のスペイン語を聞く機会があるのが良い。
- ・授業だけでなく学生が自主的に勉強しなければレベルアップは難しいと思う。

#### 「語学文学コースについて」

- ・とても楽しくためになる。
- ・面白い。
- ・専攻の授業では得られない深い知識を得られるので良いと思う。
- ・難しく大変だけれど興味深く学び甲斐があり、スペイン語の上達に役立っている。
- ・資料の分量が多いのでテストが不安だ。

#### 「留学制度について」

- ・きちんと評価してほしい（単位互換）。

上記のうち、留学先で取得した単位もきちんと評点化して読み替えられており、ただし学務上の制約により、成績票では「認定単位」として表記されているという事情があります。

翌 2014 年度の自由記述のテーマは「ゼミ制度について」というものでした。その際、イスパニア学科の学生からは以下のような意見が出されました。

#### 「全コースについて」

- ・外大は 4 年生でも専攻授業が多い上に、ゼミ、卒論があると、就職・進学活動との両立が難しい。自由選択にできないか。
- ・私のゼミは就職活動との両立が考慮されている。
- ・ゼミ選択の際に情報が足りない。
- ・3 年次と 4 年次の間でゼミの変更ができるようにしてほしい。
- ・ゼミは 2 年生からスタートしてもいいと思う。
- ・もっと多様性がほしい。

#### 「語学文学コースについて」

- ・少人数で、教員との距離が近いので、とても良い。
- ・興味があるテーマについて詳しく学べるので楽しい。
- ・ゼミ合宿など、ゼミ内のつながりがもっとほしい。
- ・その年によって受講できるゼミの数に変動があり、選択の幅が狭くなるのが残念。

上記のうち、受講できるゼミ数の変動については、ここ数年、退職を控えた教員のゼミ募集が行えなかったという事情によるもので、今後は改善されていくと思われます。ゼミの選択に際しては、事前に資料を配布したり説明会も実施されています。いずれにしてもより詳細な情報提供を求める声があるため、プレゼミのようなものも含めて、何か全学的な取り組みを行う必要があるのかもしれない。

以上、アンケートに寄せられた学生の声から見る、神戸市外大イスパニア学科の現状でした。

## 学生の海外体験記

### 南米大陸一人旅体験記

荒川 亜弥  
イスパニア学科 4年

私は2014年に1年間休学して、ラ・リオハ大学への3か月の派遣留学と南米で2か月一人旅をさせていただきました。どちらもご紹介したいところですが、頂いたページ数は限られていますので、南米でのエピソードを中心にお話させていただきますと思います。というのも、私はこの旅で「言語を通じた人とのつながり」をより強く意識するようになったからです。

冒頭で一人旅と言いましたが、はじめから一人にこだわっていたわけではありません。同じく一年休学をしているクラスメイトも多く、南米に行く友人はいくらでもいるだろう、とっていたのです。しかし、わたしの行きたかった時期にはたまたま一緒に行ける友人がいなかったため、しかたなく一人で行く準備を始めました。このとき、私は「せっかくだから、今後のために一人で生きていける力をつけよう」と意気込んでいました。実際、安全面には細心の注意を払ったおかげで怪我もせず、何も盗まれずに帰ってくることはできました。ただ、今思い返してみると、一人旅をすることでむしろ「一人では生きていけない」ことを実感させられた気がします。ひとつ具体例を挙げると、実はこの旅行中に一度だけ、危険な目に遭いかけたことがあります。チリ北部の町カラマから首都サンティアゴに向かう道中、イキケのバスターミナルに寄った時のことです。乗っていた長距離バスが給油するというのでバスを下ろされ、15分ほど待つこととなり、そのあいだにわたしはターミナル内のカフェで軽食を買いました。そのままカフェの店員さんと会話していると、背が小さく、やせこけた男性がやってきて話しかけてきました。わたしに向かってしきりに何か訴えてくるのですが、訛りがひどすぎて何を言っているのか聞き取れません。しかたなく「わからない」と告げると、彼は「また戻る」といってどこかへ行きました。すると、やりとりを見ていた店員さんが隙を見てわたしにこう言ったのです。「あなた今誘拐されかけてるわよ」、と。どうやら彼は、わたしの乗っていたバスはもう行ってしまったから彼の車にのせてあげるよ、荷物を持ってついておいで、と言っていたらしいのです。もちろん、そのときバスはまだ給油中でした。血の気がサーっと引きました。誘拐のターゲットにされていた

ショックも大きかったですが、店員さんがあの時みずからの危険を顧みず教えてくれなかったら、今こうして体験記を書くこともできていなかったかもしれません。他にも、ブエノスアイレスのバスターミナルで派手に転んだときに手を差し伸べてくれたおばさんや、アルゼンチン北部の町ウマワカで、山小屋に住むおじいさんの作る絶品のヤギのチーズを教えてくれたヒッピー風の男性、年末で宿が埋まっていたサン・ペドロ・デ・アタカマで空きのあるホステルが見つかるまで一緒に歩き回ってくれた地元のおじさん、クスコでクレジットカードが使えなくなり途方にくれていたときに協力してくださったOGの大倉みどりさんとお勤め先のナオツアーの方々など、さまざまな人に助けられました。見知らぬ土地で、会って間もないような人にさえこれだけ助けられたのです。普段の生活で、わたしの身の回りにはどれだけ支えられているのでしょうか。それに気づかずに「一人で生きていく力をつけよう」などと考えていた自分が恥ずかしくなりました。

そして、旅行中にわたしと現地の人々をつないでくれたのは、スペイン語でした。英語がほとんど通じない南米大陸で苦勞する日本人旅行者も多いなかで、観光だけではなく、地元の方々とより深いつながりが持てました。それは、日本人であるわたしが彼らの母語であるスペイン語を話す親近感によるものだったと思います。留学も含め、その一年の海外での経験は、今まで大学で学ぶ「教科」だったスペイン語を「言葉」として受け入れなおす機会になりました。ひとつの言語を理解すれば、その言語を話すすべての人々と語り合える可能性が生まれる。当たり前のことですが、これは実際に経験したからこそ実感となって得られたのだと思っています。

出発当日の朝、帰国便の出るブエノスアイレスにある、二週間お世話になった日本人宿を出ました。オーナーご夫婦や旅人仲間とお別れをしたときも、不思議と悲しくありませんでした。また戻ってくると、根拠のない自信があったのです。帰りの飛行機の中で旅を振り返ってみると、はじめはその土地の景色や文化を楽しみにしていたはずなのに、思い起こされるのは出会った人の顔ばかり。あらためて、出会いに恵まれた旅だと感じました。

早いもので、南米に行ってからもうすぐ一年がたちます。このあいだ、少し遅れて就職活動を終え、今は卒業論文とアルバイトに明け暮れています。来年の4月からは物書きの仕事をさせていただけることとなりました。中学生のころからの夢でもあり、留学や旅で感じた「言語を通じた人とのつながり」に惹かれ、自分なりに道を探した結果です。これからは母語の日本語で、わたしが紡いだ言葉が、人と人をつなげるお手伝いをできればと思っています。

今回のイスパニア学科の劇は、Alejandro Casona 『La barca sin pescador』(漁夫なき漁船)であった。イスパニア語劇団からは次のようなあらすじの紹介がある。「季節は冬。場所は実業家リカルド・ホルダンの事務所。競争相手の策略により会社の株価は暴落、愛人や仲間にも裏切られ、窮地に立たされていた。そこに謎の黒衣の紳士が現れ、ある取引を持ちかける。その取引の内容とは、殺人を犯すのと引き換えに彼を救ってやろうというものであった・・・」この劇に参加した一人の学生から、このイスパニア劇をスペイン語で紹介する、熱意あふれる文が寄せられた。

Saori Kobayashi

Estudiante de tercer curso

Departamento de Estudios Hispánicos

El día 5 y 6 de diciembre de 2015, se celebró en “Kobe Art Village Center” el sexagésimo sexto festival de teatro en lenguas extranjeras. En estos últimos años, nuestro grupo teatral de español habíamos ganado continuamente el primer premio, pero este año hemos ganado el segundo. También hemos ganado otros premios: iluminación, sonido, escenografía, etc. Una actriz ha ganado el premio especial del jurado.

Este año hemos representado “La barca sin pescador”, una obra de teatro escrita por Alejandro Casona. El protagonista, que se llama Ricardo Jordán, decide hacer un pacto con el diablo para escapar de la mala situación de su negocio. Desde entonces, su mundo va a cambiar y también él mismo cambia totalmente.

Al igual que otros años, este año hemos podido realizar un teatro de dos horas con el apoyo de profesores, ex-alumnos, miembros de la organización del festival y otros más. Sinceramente damos las gracias a todos.

Cada año, nos preparamos para el teatro durante tres meses. Somos treinta y dos miembros. Nos dividimos en seis secciones y nos colaboramos para llevarlo a cabo. Cada uno tiene experiencias y conocimientos diferentes, así que a veces discutimos para hacer una escena. Aunque tenemos muchos problemas, todas las cosas son necesarias para crear un buen teatro. En otras ocasiones, tres meses nos parece mucho tiempo. Sin embargo, cuando nos preparamos, el tiempo pasa muy rápido. Es un tiempo sustancioso, y también es una experiencia insustituible para nosotros. Ya hemos empezado a preparar el teatro del año que viene, para volver a ganar el primer premio. Haremos todo lo posible para realizar nuestro deseo. Espérennos con una expectación.



## 会員の近況報告

阿部 修 1966年（昭和41年）卒

毎日酒を飲み（ウイスキーですが）歌を歌い、シーズンは弱いタイガースを応援して、時に孫と遊ぶ毎日です。学生時代コーラスをやっていた経験を生かして、阪神間の高齢者介護施設を訪問して歌のボランティアをしています。童謡、唱歌、歌謡曲、軍歌と一人でアカペラで13年続けています。また地元の公民館で2011年から年2回110名シニア世代を対象に公民館の行事として歌のコンサートをしています。最後に一句「音楽と少しの酒があればよい」

伊藤 明 1966年（昭和41年）卒

4年ほど前からテニスを再開、毎週2-3回汗をかいています。ほかにゴルフ、登山も楽しんでいます。前の会社の山好き仲間達と昨年11月には念願の百山踏破達成ができました。関西近郊の中低山が多いですがそれでも18年もかかりました。同期生の元ワンゲル猛者の杉井氏にも今まで阿蘇、九重連山や北アルプス縦走などタフな登山に先導してもらっています。いつまで元気でやれるのか少し気になる年齢にもなってきましたが少しでも長く続けていければと思っています。今の健康を神に感謝、**muchas gracias!**



薬師岳山頂から槍ヶ岳と穂高連峰の眺望

2014年7月 同期の杉井氏（左）と薬師岳山頂にて槍、穂高連峰を背にして

杉井 皓一 1966年(昭和41年)卒

今年は日伯修好 120 年で秋篠宮ご夫妻がブラジルを訪問され、桜の代りに各地でブラジル国花のイペーの木を記念植樹されました。黄色の花が咲くイペーが国花ですが、他にも白、ピンク、緑色の花が咲くイペーがあります。このイペーを日本に広める運動に参加していてブラジルから送付された種子を苗木に育てて知人に配ったりしていますが、神戸外大にも 1 m 程に育てたイペーとジャカラндаを植樹しました。来春か再来春には開花すると期待しています。ご興味のある方には種子を差し上げます。 [sugii-k@hotmail.co.jp](mailto:sugii-k@hotmail.co.jp)



イペー (ブラジル国花)



ジャカラнда (ブラジル原産)

荒川 弘道 1967年(昭和42年)卒

私の定年を待っていたかのように腰が悲鳴をあげ始め以来狭窄症の手術を3度経験。社会人としてモーレツに働いた咎め(?)なのか、その後も身体のガタが続き古希を過ぎた今産婦人科を除く殆どの医者のお世話になる始末。対策は色々な医者意見の集約がウォーキングに落ち着くようです。腰痛を抱える為休み休みながら毎日1万歩の歩きに挑戦中です。TV番組では医療関係は必見ながらやはりスペイン語に郷愁が残っていてBS放送の「世界ふれあい街歩き」等でスペインの街が紹介されたら必ず録画し脳の片隅に僅かに残っているスペイン語を必死に掘り起こす自分を発見します。

中野 利勝 1967年(昭和42年)卒

相変わらず、週3回のテニス、庭の手入れや隣接する緑地の除草、剪定、private businessなどで毎日日曜日ですが、忙しくしております。来る11月18日には東京在住の外大OB/OG(42期生のみ)の食事会があります。これは平成24年度の外大東京支部総会の年次幹事に42期生になった縁で、毎年11月に10名ぐらいが東京に集まります。テニスの方は、今年5月に軽井沢にて関西・関東・NewYorkのOB/OG13名が集まり合宿(2泊)、その時、錦織圭さんのWimbledonの勝試合をテレビで見、盛り上がりました。合宿は今年で3年目です。イスパニア語は何十年とご無沙汰ですが、La historia de un amorやBésame muchoは空で歌えます。

中西 博美(旧姓:寺島) 1967年(昭和42年)卒

遅刻寸前、毎日のように旧外大の地獄坂を走って登ったことが懐かしい。私はあの頃、70歳にもなれば人はもう何かを成し終えてゆったりと暮らしていると思っていた。今、私は70歳。相変わらず日々あたふたと駆け回り、合間に好き勝手にガルシア＝マルケスなどを読んでいます。大学で学んだことを何百倍にも膨らませて社会にお返しするはずであったのに、見事にスペイン語は唯の趣味の一つにしてしまった。生涯の楽しみを与えて下さった先生方を忘れることはありません。

恵 利勝 1967年(昭和42年)卒

2011年6月5日より長年温めていたスペイン巡礼の旅に行ってきました。30日の徒歩の一人旅でしたが無事コンポステーラまでたどり着きました。欧州・南米・米国・韓国等、毎日同宿者とも馴染みとなり戦友のようです。昨年(2014年)、2回目の旅に出ました。南のセビーージャから向日葵、サボテンを横目に出発しサモラまで行けました。前回よりも人は少なく長かった。来年(2016年)は海沿いの巡礼道「北の道」40日を目指して検討をしているところです。

森本 悠子（旧姓：斎藤） 1975年（昭和50年）卒

卒業して早40年が経ちました。スペイン語とは縁が切れず細々と続けています。（若さを保ち頭の活性化には最適かと……）夫、息子、愛犬をおいての1年のスペイン留学からも早13年。もう一度と思いつつ10年以上の月日が過ぎてしまいました。文字通りの3食昼寝付きの学生生活が懐かしく思い出されず。退職後は夫と二人でゆっくり旅したいと思っています。

河内 千春（旧姓：大沢） 1977年（昭和52年）卒

大学卒業以来、日本語教育の仕事をして細々と続けています。また、20年以上、



国際NGOの支援をしています。最近では、小・中学生向け開発教育ワークショップ企画などの活動も。さらに、2008年からはアマチュアのシニア劇団で年に1~2回の公演に参加。2015年夏には初めてプロの役者さんたちと共演しました。2016年春には台湾で公演する予定です。

もっと書きたいことはあるのですが、字数制限が……。また別の機会に。

鶴野 昇 1978年（昭和53年）卒

卒業後、大阪の自動車部品メーカーに就職、イギリス、ハンガリー駐在を経1995年より現在まで、アメリカ ミシガン州に在住です。2011年~13年にかけてメキシコ、アグアスカリエンテス州にて勤務、また前職定年後に再就職した会社でも、2016年春頃より2年間メキシコ勤務予定です。卒業後 神戸外大とは全く連絡取っていませんでしたが、英米学科のバスケットボール部の先輩より本会のご紹介を頂き、寄稿した次第です。78年卒業の皆さま、お元気ですか？ 40年前の学生生活が懐かしく思い出されます。

福原 末美（旧姓：辻川） 1994年（平成6年）卒

外大を卒業して約10年後に臨床心理士の資格を取り、現在は大阪で中学・高校のスクールカウンセラー等の仕事をしています。大学時代の自分と同じように、将来どうすればいいのか悩む若い人へ、「今やりたいことをすればいいよ。いくつからでも方向転換できるから」と背中を押せるようになりました。外大で培った探求心(?)と遠距離通学の経験、そして旅する楽しみが今の自分を支えています。

山崎 はつ恵 1994年（平成6年）卒

十数年前に、神戸から故郷の高知に戻りました。地元の企業に勤めながら趣味を楽しむ日々です。震災の後で一念発起して始めたフラメンコは、早いもので20年になります。スペインに関わる趣味と同時に、日本のことも学びたいという想いが年々強くなり、3年前から神道夢想流杖術(じょうじゅつ)と、長宗我部家居合兵法精参流を学んでいます。

高知に戻ってからはスペイン語には全く縁のない生活ですが、ラジオを聴いたりドラマを観たりしながら、マイペースで楽しんでいます。

神崎 桃子 2012年（平成24年）卒

私は現在、アパレル企業に就職し百貨店で販売員として働いています。今の仕事でスペイン語を使う機会はあまりありませんが、時々スペインや中南米からのお客様もいらっしゃり、スペイン語で接客をするととても喜んでもらえ、私も嬉しくなります。外大の友達とは今でも仲が良く、会うと変わらないみんなの笑顔に支えられています。外大で出逢えた友達は私の一生の宝だと心の底から思います。

木村 萌 2014年（平成26年）卒

卒業後、一年間スペイン語の通訳をし、今は印刷会社で営業をしています。先日、会社からの研修でユニバーサルスタジオジャパンのホラーナイトと高野山登山に行きました。「楽しいことも、しんどいことも、全力で取り組みなさい」という教えのようです。夜更かしをして遊んだ後はぐっすり眠ることができ、約5時間かけて険しい山を登った後の精進料理と温泉は素晴らしく、何より、「登山中飲食禁止」の掟を破って、社長に隠れて口にしたポテトチップスは格別の美味しさでした。(実はバレていました)これからも、何事にも一生懸命、時にはこっそりと自分を甘やかし、叱られながら頑張ろうと思います。

黒田 和花 2014年（平成26年）卒

メーカー社長秘書をしています。職業柄「おしとやか」に努めていますが、連休の度にそんな私は一変、大学時代から生きがいの一人旅を続けています。



この間はモンゴルの大草原へ行ってきました。安宿、泥だらけのスニーカー、たまにハプニング、そして一生忘れられない光景や出会い。東京での日々にこれ以上ない鮮やかさを与えてくれます。外大で学んだ経験は、今でも私に「世界は大きく広がっている」ことを教えて続けて続けてくれています。感謝です。

三尾 菜摘 2014年（平成26年）卒

卒業から1年半、姫路の鉄鋼メーカーに勤めています。スペイン語を使う仕事ではありませんが、海外とのやりとりは頻繁にあり、所属の務課内外から英語での外国人の案内や通訳などを任せられることも増えました。言葉はツールだと言いますが、そのツールによっていかに世界が広がるか。当社初の女子社員単独海外出張の機会を得て身に染みて感じました。今後も外大で得たツールを大切にして日々を過ごしたいと思います。

村上 今日子 2014年（平成26年）卒

「人生一度きり」。今のわたしが毎日口にする言葉です。就職してはや1年。外大を卒業後、留学のサポートという、語学と自身の経験を活かせる仕事につけたことをとてもしあわせに思います。英語圏への留学を希望される方が多いなか、少数ながらスペイン語に興味を持っている人に誰よりも勇気を与えられるのは、自分が好きだと思ふことを専門で学ぶことを選び、同じ気持ちをもった人々に囲まれながら学生生活を送ることができたおかげだと思っています。

山岡 祐子 2014年(平成26年)卒

私は今、服飾資材を扱う商社で貿易関係の仕事をしています。現在入社2年目ですが、ようやく貿易の基本的な知識も付いてきました。主な相手国は中国、ベトナムを始めとするアジアの国々です。ローカルスタッフはそれぞれの母国語に加え日本語・英語がほぼ完璧な方が多く、



やり取りに困ることはありません。そんなスタッフの方々を見習い、私もしっかりとスペイン語の学習を続けていきたいと思う今日この頃です。

野澤 健介 2015年(平成27年)卒

4月から報道機関で働いています。配属先は運動部(スポーツ部)。まだ担当競技はありませんが、試合に会見、公開練習など様々な現場にスクランブル発進で、日々勉強です。見て聞いて、書くだけなのですが、それが難しい。大学時代の初めはイスパニア語動詞の活用に苦しみましたが、今は日本語の難しさに苦しんでおります。講読の授業で訳文をもっと真剣に作っておけばよかったと感じます。このようにまだ未熟ですが、社会に役立てるよう、精進してまいります。

神戸外大イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2015年05月23日暫定

会 長	西川 喬	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
副会長	谷 善三	(16回)	昭和42年(1967年)卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年(1966年)卒業
	坂根 博	(21回)	昭和47年(1972年)卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年(1977年)卒業
	冨尾 圭子	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年(1981年)卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年(1992年)卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年(1998年)卒業

理 事

池沢 英一	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
内田 雅夫	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
増野 俊則	(22回)	昭和48年(1973年)卒業
和久田 好男	(23回)	昭和49年(1974年)卒業
齋藤 仁	(24回)	昭和50年(1975年)卒業
田岡 敬造	(25回)	昭和51年(1976年)卒業
松久 恵美子	(31回)	昭和57年(1982年)卒業
塩川 雅美	(32回)	昭和58年(1983年)卒業
石田 敦子	(33回)	昭和59年(1984年)卒業
伊藤 卓郎	(35回)	昭和61年(1986年)卒業
吉田 葉子	(42回)	平成 5年(1993年)卒業
中沢 純一	(43回)	平成 6年(1994年)卒業
吉田 昌洪	(43回)	平成 6年(1994年)卒業

伊藤	かおり	(44回)	平成 7年 (1995年)	卒業
中川	智子	(50回)	平成13年 (2001年)	卒業
岡部	祥子	(51回)	平成14年 (2002年)	卒業
長谷川	くにこ	(52回)	平成15年 (2003年)	卒業
森田	智香子	(53回)	平成16年 (2004年)	卒業
濱田	香里	(54回)	平成17年 (2005年)	卒業
赤澤	理絵	(56回)	平成19年 (2007年)	卒業

監 事	松田	侑子	(53回)	平成16年 (2004年)	卒業
	森川	香織	(53回)	平成16年 (2004年)	卒業

## 「会員の近況報告」に関する投稿規定

2015年3月  
2016年2月改定

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. 文字サイズは12、字体はMS明朝体とする。ただし、この字体がなければ、他の字体でもかまわない。
4. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
5. 写真を提供することができる。ただし原則として、本人が写っているもので、1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
6. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

## 編集後記

3年前、およそ20年ぶりに関西に戻ると共に、竹谷先生に声をかけられてイスパニア同窓会の理事に名を連ね、その流れで学生時代に大変お世話になった（ご迷惑をかけた）西川先生より「若いんだからPCは得意だよな？」と声をかけて頂き、今号より会報の編集委員として参加させて頂くことになりました。

これを読んでいる皆さんは、卒業して何年経っていますか？当たり前なのですが、大学に居た期間なんて人生のほんの4~5年です。そのたった4年のおかげで、「神戸外大イスパOB」というその事実だけで、その後の人生でどれだけ沢山の方に声をかけてもらい気をかけて頂いたか、ここで語りつくす事はできません。

「神戸市外国語大学イスパニア学科」という名の船の長い航海は、これからもまだまだ続いていきます。会報という名の航海誌の編纂に関わる事で、少しでも恩返しができるばと考えています。

そして皆さんも偉大なる船の乗組員の一人です。どうぞお気軽に投稿をお願い致します。

### 会報編集委員

西川 喬

谷 善三

田岡 敬造

伊藤 かお里

吉田 昌洪（記）

イスパニア会 会報 第3号

---

---

神戸市外国語大学イスパニア学科  
イスパニア会

イスパニア会会報 第3号  
2016年3月31日 発行  
発行者 会長 西川 喬  
発行所 イシダ印刷株式会社

---

---